随想

あぁ　若鮎躍る

学校経営部　　三津間　安　宏

水ぬるみ若鮎躍る頃となった。鮎，冬幼く群れ春銀鱗，流れを逆らってのぼる。夏長じ，孤石を守り，わが命をはみ跡に刻む１科１属１種の清流の香魚……この鮎と出会い，鮎釣りに憑かれて幾とせになるだろうか。桜が過ぎるともう鮎を迎える気分になる。解禁が日いち日と迫ってくる歓びは，当初の頃と少しも変わらない……。

当センターでも，釣りを趣味とする先生方がかなり多い。特に渓流岩魚・山女魚釣りが盛んのようだ。岩魚釣りを将棋に，鮎釣りを囲碁になぞらえた人がいたが，前者の１本勝負の直截さと，後者の定石をふまえつつも，知的遊戯のような面白さとを比べてのことであろうか。個性がみえてうなづける。私はいま，何故か後者の鮎釣り，それもドブ釣り（沈め釣りともいう。毛針を水中で踊らせ竿を操作し釣る技法。群れてのぼる若鮎を追う。）にこだわっている。緑したたる初夏，翠らんに身を置き，その悠久さにひたる感動はもちろんだが，どうもそればかりではなさそうだ。

はやる胸をおさえつつ釣場に到着，夜明けも近い。川相をみる，川底を想定し場所を決める。つぎに仕掛け，毛針の選定である。昨年までの実績メモで熟慮はしてきたが，流れの緩急・川面の光の明暗・水の清濁によって思いをめぐらす。いよいよ川に入る。胸までつかり立ち込む。長竿を操作して，まるで虫が舞い上がったかのように，石垢（けい藻・らん藻）が，いま剥がれたばかりのように，見えない水中の毛針の踊りを工夫するのである。これらがぴったり合い，鮎が興味関心を示したとき食いつくのである。だから，本日の釣果は，この条件整備が適切であったかどうかにかかる。それは長年の意図的経験で身につく。肩々相摩する隣りの釣人ばかりにかかり，私はさっぱりで恨めしく思ったこと数多い。実に奥深く，いつも研究と修養が必要なのである。

私がこの釣りに憑かれこだわるのは，この探究する道にひかれるからかもしれない。そういえば，先達の釣師がこう言った。「釣道はあなた方が努力している教育道に通じる」と。なるほど，若鮎が群れ躍る姿は，児童生徒の生き生きと活動する姿そっくりだ。希望に燃え明日に向かって進む姿は，とどまることを忘れたかのように遡上する若鮎そのままなのである。そして私どもが努力する川相の理解は，地域・児童生徒の実態把握であり子ども理解である。仕掛け・毛針の選定は，仮説ともいえる手だての工夫であり，竿の操作は，指導法・指導技術ということになろうか。そう考えると，これはそのまま教育研究法であり，毎日の意図的指導姿勢づくりになっているかもしれない。それに何よりもこの場合，本人の自己啓発による課題解決意識が旺盛だ。「自己教育力がこんなところに発揮されているのかな」と，こじつけながら妙なところで合点したりもする。

若鮎はやがて成長して自分だけの石を守る。児童生徒も同じである。私たちはそのひとり立ちまで，日々受容的態度で個々の個性に共感しながら，細かな手だて配慮をし，援助指導に心がけ努力はしているが，これがまた難しい。どの道も奥深い。いつの日にその奥義をきわめることができるのであろうか……。

何はともあれ，悠然と河原の大石に腰をおろして，持参のにぎりめしにかぶりつきながら，鮎というもの言わぬ美人と自然の中に溶け合うとき，「よし，やるぞ」と明日の仕事に意欲がわいてくるから不思議である。